
小さな運命共同体

哀 l o v e コナン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな運命共同体

【Zコード】

N4767Z

【作者名】

哀10vēコナン

【あらすじ】

短編集として書きたかったんですが、あまりにも長くなり過ぎて
…連載にしました

予定していたものプラス少し加えて、『哀小説を今度は連載して行
きます。

医療全く無視をした『哀』です。ネタバレになるので、どうかで言
つておきます。どっちかの死ネタになりますので、ご注意して読ん
でください。

前作見ていただいた方はわかると思いますが、またあの優しい先生
が出てきます。

「哀を好きな人にとっては怒られるかもしれないですが、嫌な人は
ここでスルーしてください。

そして、今回は一話一話が短いと思います…前作と比べると…それ
と、あくまで「哀なので、新一や新一の両親などの登場はありません
…」…服部も（今の段階では）出てこないと思います。

それを含め、大丈夫な方のみ… 閲覧お願いします。

▼01・1 プロローグ～運命…それは…変えたいもの

運命…それは、一人一人が神様によつて授けられたもの…。

運命…それは、自分自身でどうにでも変える事が出来るもの…。

きつと、これもまた…”運命”なのかもしれない…。

”工藤君…私は貴方に…何もしてあげられないのよ…。”

”お前は生きてくれてるじゃねーか…それだけで充分だよ…”

その言葉を交わした君と僕との間には…何があつたんだろう?…その言葉…ちゃんと君に伝わったのかな…いつだつて、励ましていたはずだったのに…。

でもこれが…君と僕の…最後の物語になつてしまつたんだね…。

君の運命を僕は変える事が出来たのかな…本当に君は…それで幸せになれたのかな…。

でも、君にあんな運命背負わせたくないなかつたんだ…だから、君の運命を…僕が変えてあげたかつたんだ…。

だから、お願い…僕がした事、許して欲しいんだ…。

そして…生きる事を諦めないで…お願いだから…なあ、灰原…!!

▼01・1 プロローグ～運命…それは…変えたいもの（後書き）

始まりました。

プロローグなので今日は短いです…。

読んでもらって嬉しいです。

今回は不定期になりますが、よろしくお願ひします。

時間があれば、それほどあかず、投稿できるとおもいます。

また、今回もヒントを残して、
次に進みたいと思います。

次回ヒント
準備したい事

次回、またよろしくお願いします。

ある平日の朝…。

とある病院に来ていたコナンは、診察室で…蘭と小五郎が見守る中…医師によつて、胸に聴診器を当たられていた…。

「うん…大丈夫だね。順調、順調…」

コナンの胸に当たられていた聴診器を離しながら、今度はコナンの頭に手を当てて微笑む先生の名は坂井医師…。

コナンが最も慕つている…コナンの主治医でもあつた…。

「コナン君、こないだの話なんだけど…そろそろ、準備したいんだ…返事聞かせてもらえるかい?」

「まだ、大丈夫だよ…」

そう話すコナンは何となく、淋しそうな表情を浮かべて俯いていた…。その様子に見兼ねた坂井医師は、コナンに言つた。

「…ねえ、コナン君…先生、ちょっと毛利さんと蘭さんに話がしたいから…コナン君は先に戻つていってもらえるかい?」

「僕だけ…内緒の話?」

不安な面持ちで坂井医師の顔を覗き込むコナンを見た坂井医師は、にっこり笑いながら…コナンの頭を撫でながら言つた…。

「違うよ…コナン君が納得してもらえるように…相談しなきゃだか

ら…それに、早くしないと取り返しのつかない事になっちゃうから

ね…

「…うん」

突きつけられた自分の現実に、コナンは納得したくなくても、頷くしかなかつた…。

そんなコナンを見た蘭はコナンの顔を覗き込んで、諭すかの様に話出した…。

「コナン君、大丈夫よ…すぐ行くから、病室でちやんと待つて…」

そう言われたコナンが診察室を後にした後、坂井医師は小五郎と蘭に話を始めた…。

「先日もお話ししましたが…コナン君の手術の準備をそろそろ取り掛かりたいと思うんですが…」

そう話す坂井医師だったが、コナンの事を思つあまり…自然と目が泳いでいた…。

「手術自体は、そう難しくないんですが…コナン君が手術を拒んでる今の状況では、こちちらとしても手術を行えないんです…ですから、毛利さん達から説得してもらえませんか?」

コナンに病気の事や手術の事を話してから、コナンがずっと手術を拒み続けていた事を坂井医師は心配していた…。

でももう、時間が限られている…そんなコナンの手術に、坂井医師は少しばかりの焦りを感じていた…。

「でも、先生…私達が言つても…「コナン君、分かつてくれないと思うんです…だから、先生から話してもらえるといいんですけど…？」

蘭は「ナンの性格を分かつっていた…蘭達が手術の事を話しても”大丈夫”と言つて、聞く耳を持たないかも知れないから…。

だから、先生からもう一度言われた方が分かつてくれると、確信していた…。

v01・2 診察結果（後書き）

今晚わwww

今日は変な時間に投稿ですwww
一応、ストックが溜まって来たので
しばらくは毎日投稿になるとおもいますwww

次回ヒント
哀ピンチ

次回もお楽しみに

▼01・3 いなくなつた小さな探偵と夜に迫る悪魔（前書き）

今回、コナンは出て来ませんww
明日までお待ちください（。。一一一）

「分かりました…」

蘭の頼みを聞き入れた、坂井医師はコナンにもう一度、手術の事を受け入れてもらえるように…蘭と小五郎を連れ、コナンが戻つたであらう病室に足を運んだ…。

コナンの病室の扉を開ける坂井医師は、目を見開いた…。

「あれ? コナン君?」

病室に戻るよつて言つたはずのコナンの姿がどこにもなかつた…。

そればかりか、置いてあつたはずのランドセルが、見当たらない事に気付いて…坂井医師はため息を一つした…。

「あのガキ…どこに行きやがつた…! 蘭、お前はここにいろつ…」

そう言つて、コナンを連れ戻しに行こうとする小五郎を坂井医師は止めた…。

「まあまあ、毛利さん…今すぐどうこういう問題ではありませんから…とりあえず、様子を見て見ましょつ…コナン君ならきっと大丈夫ですから、帰つてくるのを待ちましょつ? それに…」

そつとひいて、腹を立ててる小五郎を落ち着かせた…そして、ひと呼吸置くと、再度口を開いて言つた…。

「行き先は…分かつてますから…」

一方、阿笠邸では…自分自身に降りかかる悪魔が徐々に詰め寄つて
事に気づかず、哀はいつもの朝を過ごしていた…。

「博士…」「コーヒー、ソーラー置ことくわよ…」

「ああ、すまんな哀君…」

そつと、哀の差し出した「コーヒーに手を伸ばし、それを口にす
るのを見た哀は…つと笑い、嫌みをいいながら玄関へと歩き出
た…。

「じゃ、私は学校に行つてくるわ…博士…私がいないからと言つて、
高力口リーな物食べ過ぎなによつにね…」

「分かつとるわい…」

そういうながらも、残念そうな顔をする博士の顔を振り返つて見た
次の瞬間…哀は胸を抑えしゃがみこんでしまつた…。

驚いた博士は哀に近づき、心配な面持ちで声をかけた…。

「哀君…どうしたんじや？」

「何でも…ハア…ないわ…ハア…いつもの事よ…ハア…すぐ治まる
わ…」

「いつも?」

驚いた博士は、哀の発言に耳を疑つた…。

「最近、良く…ハア…あるのよ…でも、大丈夫よ…ハアハア…心配…ないわ…」

苦しみながら、心配する博士を気遣う哀…暫くすると、本当に苦しさは治まった様子で…強張らせていた顔も正常に戻っていた。

それに安心していた哀はゆっくり立つと、”ね?”といった感じで笑つて見せた…。

そんな哀の様子に不安になり、哀に病院へ行く様に勧めた…。

「平気よ…それより、博士…工藤君から何か聞いてない?」

「新一? 何をじや?」

「2日も学校休んでるのよ…まあ、博士が聞いてないなら問題ないと思つけど…じや、行つてきまーす…」

博士の心配をよそに、哀はなにもなかつたかの様に平気な顔をして学校に向かつた…。

閉まる扉を目にじて、哀やコナンの事が心配になつた博士は…暫くその扉の前で一人、佇んでいた…。

▼01・3 いなくなつた小さな探偵と哀に迫る悪魔（後書き）

次回ヒント

噂の人物

今晚わwww

今年も残り3日になりましたね

今日はスペシャルばかりで、何をみよつか迷つてしまひます（。
。 一一一）

始まつてまだ間もないこの小説なんですが、死ねたとこうのを了承して読んでいただき&お気に入り登録や感想いただき、ありがとうございます。

励みになります。

では、また明日の投稿をお待ちください

▽01・4 晴をすれば…登場

哀が教室の扉を開け、入ろうとした時…歩美、元太、光彦は哀の姿に一目散に駆け寄った…。

「哀ちゃん…おはよー」

「灰原さん、おはよーい」

話があると言わんばかりに、哀の顔をじっと見つめる三人に…哀は不思議に思いながら、平静を装つて聞いてみた…。

「おはよ……どうしたの? そんな顔して…」

「哀ちゃん…またコナン君お休みだつて…」

「えつ? そり…」

言いたい事は分かつていた哀だったが、休みと聞いて…少しばかり心配が募つていた…。

「昨日、俺ら探偵事務所に行つたんだ…でもよ、家んなか真つ暗で…誰も居なかつたんだよ…」

「何かあつたんでしょうか?」

「コナンの事が心配で堪らない少年探偵団…コナンが居るはずの探偵事務所に行つても誰もいないなんて事…今まで会つたんだろうか?」

そんな光景を目の当たりにした三人が、不安がらないはずもなかつた…。

哀はそれでも、心配させない様にと諭しながら話始めた…。

「何言つてゐるのよ…彼なら大丈夫よ、ただの風邪でしょ？病院にでもいってたんぢゃない？」

「でも…」

「だいたい、何かあつたなら私達に言つて来るでしょ？そういう人でしょ？江戸川君は…」

そういうて、三人を凝視した…。そんな哀を見て三人は泣く泣く頷くしかなかつた。

「はーい、みんなー、席に着いてーー出席を取るまえに報告です。今日もコナン君は風邪でお休みだそうです…でも、心配しないでね、ただの風邪みたいだから…」

小林先生は、教室に入つて来るなり、教室にいる生徒達に報告した…。その言葉に、三人は騒ぎだし、後ろの席にいた元太が光彦に声をかけて來た。

「なあー、今日も帰り寄つてみよーぜ？」

「そうですね…」

「階で行こーーー！」

三人がそんな言葉を交わしている時…教室の扉が開いた…。

「おはよひゞやこます…」

顔を出したのは、噂をすればの「コナン」だつた…。

「コナン君ーー！」

コナンの休む連絡を受けた直後の出来事だったので、さすがに皆驚いていた…。

小林先生がコナンに近寄り、自分の額とコナンの額を触り、見比べていた…。

「熱はないみたいだから、大丈夫そうだけど…」

「大丈夫だよ…もう治っちゃったから…」

「でも、無理しちゃダメよ?」

「うん、分かった!…」

そつ言葉を交わすと、コナンを席に着かせた…。

席に着いたコナンは哀に”よつ”と、挨拶すると、哀は無駄な心配させられた事に不機嫌になり…瞳だけコナンの方に向かせると言った。

「余計な心配させてんじゃないわよ…」

「なんだお前、心配してくれてたのか…」

「私じゃないわ…あの子達によ…朝から大変だつたんだから…」

「…」

哀にそう言われたコナンは、ゆっくり三人の方へ視線を移すと、三人は心配な面持ちでコナンの方を見ていた…。

▼01・4 嘩をすれば……登場（後書き）

こんにちは

とうとう残り2日を切りましたねW

来年にどんな一年にしようか考えさせられます

今日はもう一話、夜に投稿予定です。

仕事がない時は、ここにでもこの投稿が長く感じます。

では、また夜に会いましょう*。

次回ヒント

「「ナンバーん、哀ちゃん…！」

「帰りましょーー！」

「行こーぜー！」

授業が、終わり…帰る支度をしている「ナン」と哀に向かって言葉が投げかけられた…。

「おうー…帰ろーぜ、灰原…」

「ええ…」

そう言つてランドセルを背負うと、五人揃つて…久々の下校を共にしていた…。

そして……これが最後の五人揃つての下校になるなんて、この時は知る術もなかつた…。

「大丈夫ですか？」「ナン君…」

「ああ、平気だよ…悪かつたな…心配かけちまつて…」

「いえ…では、僕達こっちですか…」

そう言つた光彦を先頭に、曲がり道に差し掛かった三人は一人に手を降り叫んでいた…。

「また明日会いましょう…」

「哀ちゃん、またね～」

「じゃーなー、コナン……無理すんなよーーー！」

そう言つ三人に、コナンは大きく手を降り……哀は顔だけ向いて微笑んでいた……。

「わーつてゐよ、じゃーなー」

一人だけになつて……哀は漸く本題を切り出す事が出来た。

「ねえ、今朝何で遅刻して來たの？」

「ああ、ちよつと寝坊しちやつて……」

分かりやすい嘘をつくコナンにジト田で見る哀は……田線を戻すと言つた……。

「遅刻……それで私が納得すると思つてゐの？」

「まあ、いいじゃねーか……あつ、じゃーな……」

「ちよつと……」

丁度曲がり道に差し掛かり、哀の言葉を無視して……コナンは探偵事務所の方へ歩いて行つた……。

呆れながら、哀もまた帰り道を歩いている時……胸の痛みを感じた哀は、ドサッと音を立てて……その場に倒れこんでしまつた。

それを感じたコナンは急いで哀の元へ駆けつけた……。

「おい、灰原……どうした？」

「つ、つ……痛い……胸が苦しい……痛い……」

コナンは心配な面持ちで、駆け寄り哀に声をかけるが、哀は更に胸を押さえて苦しみ出した…。

「おい、灰原…しつかりしろ…」

コナンの叫び声が響き渡る中、哀はただただ、痛みに耐えていた。.

▼ 01・5 病魔の発覚（後書き）

次回ヒント
治療中

こんばんわ、実は、ここの中に出てくる坂井先生はZARDから取りましたww

14年位、ファンなのです（^ー^）ノ

では、今日はとっても寒いから、みなさん風邪に気をつけくださいね。（^ー^）。

哀が倒れたのを田にしたコナンは急いで自分の携帯で救急車と、阿笠博士に連絡した。

直ぐに救急車が到着して…コナンも一緒に付き添っていた…。

救急隊員による処置を施されながら、コナンは哀の顔だけを見続けていた…。

病院に着き…ストレッチャーに乗せられ、治療室に運ばれる哀を追いかけながら、賢明に声をかけるコナン…。

「灰原…」

身長が足らず、哀の顔を見る事ができないコナンだったけど…哀の苦しむ声だけは耳に届いていた…。

「坊や、ちゅうとこいで待つてね…」

治療室の前まで来ると、看護婦さんが「コナンに声をかけた…その声に一つ頷くと、治療室に運ばれる哀の乗ったストレッチャーをずっと眺めていた…。

「コナン君…ダメじゃないか、走つたりしちゃ…」

その声に振り向くと…坂井医師が何時の間にかコナンの後ろに立つ

ていた……。

「先生……」

「先生の勘違いだったみたいだね……コナン君が倒れて……自分で救急車呼んだのかと思って……毛利さんに連絡しちゃったよ……」

コナンの目線まではしゃがむ坂井医師はコナンの顔を覗き込むと言つた……そんな坂井医師の顔を一度見ると……再びコナンの目線は治療室へ向いた……。

「君の、友達かい？」

そう言われ、一度俯いたコナンだったが……もう一度坂井医師の顔を見ると言つた……。

「先生……灰原……大丈夫……だよね？」

「まだ、治療中だからね……担当の先生が出て来ないと分からないな

……」

「そう……」

コナンの頭に手を置きながらついに坂井医師の言葉を聞いたコナンは寂しそうに俯いた……。

「ひひ、コナン……！」

その時、連絡を受け蘭を連れてやつて来た小五郎に、コナンは鉄拳制裁を下された……。

「痛いよ、おじさん……」

「あつたりめーだーだー誰が学校行けつて言つたんだーー病室に戻れ

つて言つただるー「がー！」

「お父さんーーいいじゃない、ちやんと戻つて来たんだから…」

その光景に見兼ねて、坂井医師は「ナンの手を握ると言つた…。

「まあまあ、とりあえず一度診察室へ行きましょー」もう分かった
よね？「ナン君…？？」

「うん…」

坂井医師の言葉に頷くと、「ナンは頭を摩りながら…診察室へ連れ
ていかれた…。

こんばんわ
お

今年最後の投稿となりました

今年も残すとこないわわわわ

力キ使見る人、紅白見る人…それですが…皆さん気が持ちのいい新年になるといいですね

また、来年会こましゅう（*、）ノ；・・* + * . . . /
歸れど、よこの年を8（< ^ 8）（8< ^ ）8
” ”

では、今年最後のヒントにいきたいと思します

次回ヒント

終束

です

新年初投稿をお楽しみに??

▼01・7 僕の約束聞いてくれない??

「コナン君、息吸つて…はい、吐いて…」

コナンは服をめぐり、聴診器を胸に当てながら…坂井医師の命令にゅうじと呼吸をしていた…。

「先生…」

診察が終わつたのを見るとコナンは静かに声をかけた…。

「灰原…」

「まだ詳しい事は分からぬけど、やつきの様子だと、心臓かな…」

そう聞いて、俯くコナンを見ながらコナンの頭に手を置く坂井医師は静かに忠告した…。

「そりそろ、君も自分の事考えなきやな…」

「…………うん…」

そつぱつと、コナンは坂井医師を見ると勢い良く言つた…。

「ねえ、先生!! 灰原の担当のお医者さん、先生がなつて…お願い!!」

「えつ~どうしてだい?」

「先生だったら、信用出来るから…」

そつ言い、俯くコナンを見ながら困つた様に言つた…。

「でもね、担当の先生は治療した先生がなる事に決まつてゐからね

…

「お願ひ…！」

そんなコナンは見兼ねた小五郎が口を挟んで来た…。

「先生を困らせんじゃねーんだよ…！」

「だつてーー！」

「わかつた！ 担当の先生に頼んでみるよ…で、その先生が承諾してくれたら…でもいいかな？」

「ありがと、先生…！」

その言葉に、明るい表情を見せ元気よく返事をするコナンを見る坂井医師は、その先生が了承したらとこつ条件で引き受けた事にした

…。

治療を終えた哀が乗せられたストレッチャーを見送った後、担当の先生に駆け寄る坂井医師は暫く話した後、コナンの元へ戻つて来た

…。

「コナン君、今先生と引き継ぎしたからね…君の友達も先生が見る事になつたよ…」

「よかつた…それで、灰原は？」

喜びと同時に、哀の状態を聞くコナンに坂井医師は説明した…。

「心臓に、爆発を抱えてるんだつて…だからね、その心臓が弱くなる前に丈夫な心臓と交換しなきやならないんだ…」

「灰原死んじやうの？」

「ドナーが見つかれば大丈夫だよ…」

そういうながら笑顔を見せる坂井医師に、コナンは言った…。

「ねえ、先生…僕、ちゃんと自分の事考えるから…約束聞いてくれない？」

「…」

坂井医師は「ナンの口から出た言葉に耳を疑つた…。

「それは、君が考える事じゃないよ…「ナン君…」

▼01・7 僕の約束聞いてくれない?? (後書き)

皆さん、あけましておめでとう
ございます(=、'、')人(、'、')
今年も引き続き、小説サイトにて、
更新に励みたいと思いますので
よろしくお願ひします(*^へへ^*)

では、新年初の更新ですwww
読んでいるとわかると思いますが、
だんだんと、コナンが何を決めようと
しているかが、わかつてくるとおもこます。

次回ヒント
涙

明日もお楽しみにwww

皆さんにとつて今年一年が素敵な
年になります様に

「阿笠さんですか？」

「はい、それで哀君は？」

「いらっしゃ……どうぞ……」

コナンの連絡で漸く駆けつけた博士は先生の案内の元、病室に向かつた。

「博士……」

「哀君……やっぱり、今朝病院行つた方が良かつたんじゃ……」

「仕方ないじやない……」「こんな事になるなんて思わなかつたんだか
ら……」

その会話に不思議に思つたコナンはベッドに近づき声をつた。

「今朝つて……何かあつたのか？」

「別に……たいした事じやないわ……」

「教えろよ……」

「何でもないつて言つてんじゃな……」

それ以上聞いても無駄な事を察知したコナンはそれ以上何も言わなかつた。

「灰原哀さんだね……これから君の治療に携わる事になつた坂井と言
います……宜しくね！」

「……」

坂井医師の挨拶に哀は何も言わず、不機嫌なまま凝視していた。

「先程の治療でね…君の心臓が原因だと分かったんだ…まずはドナー登録をして、君の心臓に一致するドナーが現れるまで入院して待とう？先生も一緒に頑張るから…」

「ドナーが現れなかつたら？私は死ぬしかないのよね？」

坂井医師の言葉に、涙目になる哀は興奮して叫び出した。

「知ってるわよ、ドナーの事…一致する心臓なんて、一握りだそうじゃない！何年待つてもドナーが現れないで死んで行く人だつているのよ！」

「灰原さん…」

「いいのよ…もつ…私は…死ぬのを待つしかないんだから…」

哀は両手で顔を覆い、酷く落ち込み泣き出した…。

それを聞いていたコナンは博士の名前を震える声で呼んだ…。

「博士…」

「大丈夫じゃ、見つかる…きっと…」

その後何度も坂井医師は励ますが、哀は一向に顔をあげてはくれなかつた…。

「とりあえず、ドナー登録の申請をしよう…もしかしたら、現れるかもしれないからね…阿笠さん、手続きをお願いします…」

「はい…」

博士は坂井医師に連れられて病室を出て行つた…。

残つたコナンは哀のそばに近寄つた…。

「灰原…大丈夫か？？」

「ええ…今の所は生きてるんじゃない？」

まるで他人事のようにいつ灰原をコナンは元氣付けようとしていた…。

「大丈夫だよ、灰原…ドナー申請したんだし、きっと見つかるや…」「見つからなければ私は死に落ちるのよ…いい気味よね、本当…」「やめろよ、そういう言い方…お前らしくねーぞ…！」

自分のことを卑下する哀にコナンは賢明に励ますが…哀の心には届きそうもなかつた…。

「出でつてくれない…」

「灰原…」

「出でつてよつ…私の気持ちなんて貴方なんかに分かりっこないのよ…」つづ…

そうコナンに叫んだ後、哀は再び両手で顔を覆つて泣き出した…言葉を失つたコナンはただただ、哀を見つめるしかなかつた…。

「また…来るから…」

そう言って、返事をしてくれない灰原を一人病室に残してコナンは静かに出て行つた…。

病室の扉を閉め、寄りかかるコナンは俯いて拳を握りしめた…。

助けたくても助けられない自分の不甲斐なさを悔やみながら…。

「んばんわ WWW

正月休みで、ダラダラしている

今日この頃です WWW

小説を毎日書いていると、突然
書きたい内容は頭の中に有るのに
言葉が出てこないって言ひ事が
あります WWW

そういう時って休んだ方がいいんだな
って後回しするのが一番ですね WWW
正月、ボケが祟ってるのかもしれませんが WWW

ではでは、余談はこれ位にして WWW

次回ヒント

帰省

次回もまた

よろしくお願ひします。

P・S

始まつてまだ間も無いこの小説に WWW
お気に入りや感想、ポイントいただいて
ありがとうございます。

それを励みに頑張つて行きたいと思います。
よろしくお願ひします^_^(^o^)^_

▽01・9 言わなきやいけない、最後のお願い

「コナン君……」

「お前ら……どうしたの？」

哀の病室の前で佇んでいたコナンは突然の訪問者に驚いていた。

「博士から聞いたんです……あの、灰原さんは……？」

「あいつ、酷く落ち込んでるんだ……だから、今はそつとじつおいてやつてくれないか？？」

病室に田をやりながら、二人に話すコナンはなんとなく、悲しい田をしていた。

それに気づいた光彦はコナンの顔を覗きながら言った。

「灰原さん、何かあつたんですか？？」

「……実はな……」

そつ話をうつとした時、コナンを呼ぶ声がして振り向いた。

「蘭ねーちゃん……」

「哀ちゃん、どうしたの？？」

蘭は病室に田をやりながら、コナンに尋ねた。

蘭の問いに頭にびりびりと俯いて、黙ってしまったコナンを見て何かあつたと察した蘭は、にっこり微笑みながら、コナンに手を差し伸べた。

「コナン君、帰る？ 病室に……」

そう言つた蘭の言葉に、近くで聞いていた三人は驚きながら、聞いた。

「病室つて？？」

「誰のですか？？」

尋ねてくる三人に、コナンは勢いよく振り向き。蘭も三人の顔を見ると少し微笑んで言つた。

「皆も来て……」

そして、コナンも蘭の発言に焦り。三人に知られたくない一心で蘭に助けを求めるかの様な細い声で名前を呼んだ。

「蘭ねえーちゃん……」

「隠しても、いずれバレちゃうんだから……言わなきゃダメよ……皆にも聞いてもらおう？」

そう言つた蘭の手を握り、仕方なく病室に戻る事にした。その後を黙つてついて行く歩美、元太、光彦は何が起こっているのか、不思議でたまらない心境だった。

病室に戻ったコナンを待ち構えていた小五郎は蘭に手を引かれ戻ってきたコナンをニヤリと見て詰め寄ると言つた。

「よし、コナン！先生と行くぞーー！」

「まだ、大丈夫だよっ」

小五郎の言葉に、いつものように手術の事を言われるかと思つていたコナンはそう叫んで逃げ出した…。

そんなコナンをあつさつと捕まえると、小五郎はコナンを抱きあげると診察室へ向かった…。

「やだよ、おじさん！降ろしてよーー！」

「黙つて来んだよーー！」

診察室の先生の所へ行くのが嫌で、行きたくないの一点張りの様子のコナンは小五郎に向かつて叫んでいた。

そんなコナンの反抗も虚しく、診察室の扉が開かれた…。

「やあ、コナン君… 今度こそ、聞かせてくれるかい？？君の返事…

……

コナンに問いかける坂井医師の後ろから心配な面持ちで顔を出した、歩美、元太、光彦の存在を確認すると… にっこりしながら、コナンの頭に手を当てて言つた。

「そうか、今まで手術を拒んでいたのは… 友達に知られたくないっ

たからかな？？「コナン君？」

「先生！！僕、先生にお願いしたい事があるんだ！！」

コナンに向けて微笑む坂井医師とは反対にコナンの瞳は真っすぐと、そして真剣に坂井医師の方へ向けられていた…。

「先生、お願ひ！！僕の最後の約束を聞いてほしんだ！！」

これ以上にない真剣さに…坂井医師は、その瞳を暫く黙つて見つめていた…。

▼01・9　言わなきゃいけない、最後のお願い（後書き）

今日は凄い寒くなりましたね
まだまだ、正月気分が抜けず寒さを雑煮でしのいでいる・今日この頃です。

休みと言つ事も、あり…この時間に投稿できるところとかもあり…
もう一話、夜中あたりに投稿したいなあと思いつつ、自分の行動を
制御してしまいます。

では、次回ヒント
本気だよ

次回もまたお楽しみに

▼01・10 ノナンの強い意思と想い

「約束つて、やつきの事かい？」

「うん……」

ノナンの真つ直ぐな瞳を見つめ、困った様な表情を浮かべる坂井医師は……ノナンから田線を反らして叫つた。

「さつきも言つたけど、それは君が考える事じゃ……」

「分かってるよ……でも、どうしても……守りたいんだ……！あいつを助けたいんだよ……」

その会話に、何の話をしているのか分からぬ小五郎達は先生に問い合わせた……。

「先生……あの、こつたい……」

「言つても、いいよ……」

その言葉に、暗い表情を浮かべると……ノナンを見つめた……。

ノナンの言葉に、更に不安な表情を浮かべる坂井医師は小五郎達の方へ向き直ると、ノナンに言われた約束を話した……。

「…………といつ訳なんです……友達の事を思つ気持ちは分かりますが……とてもじやないけど、承諾しきれません……」

先生からの話を聞き終わると…さすがに、驚きを隠せない様子でその場にいた全員が「ナンを見つめていた…。

「「ナン君…お願いだから、お友達の事は先生に任せて…君は手術をしてくれないかな…ドナーだつて現れる可能性あるんだしね…」「現れなかつたら? 現れなかつたら、あいつは死んじゃうんだよ…! だつたら…」

「「ナン君…!」

先生の説得も虚しく、ナンは頑として意見を変える様子もなかつた。

それよりも、哀を守る事ばかりを考え…元太達や蘭の説得さえも決して首を縊に振ることはなかつた…。

「お父さん…」

そして蘭が小五郎に助けを求める…小五郎は「ナンの胸元を掴み…睨みつけながら言つた…。

「お前…!…本気なのか…!…」

「本気だよ…!」

「もう一度、考え方…後悔しても知らねーぞ…!…」

「後悔なんてしないよ…!…僕が決めたんだから…!…」

「やっぱりやめるつつても、もう手遅れになつちまうんだぞ…!…

それでもいいのか…」

「そんな事言わないよ…!…」

睨みつける小五郎の言葉に、頑なに意見を曲げないナンを見て、小五郎の「ナンの胸元を掴む手に力が入る…。

「本気…なんだな！」

「うん…」

小五郎のその言葉に勢いよく頷くコナンを見て、瞳を濡らすと…コナンの胸元を掴んでいた手を離し…コナンに背を向けた…。

「勝手にして…」

そんな小五郎を見た蘭はコナンの肩を掴み…自分の額をコナンの額に当てながら、潤んだ瞳を輝かせてもう一度ゆっくり話した…。

「ねえ、コナン君…もう一度、もう一度よく考え直して…貴方がいなくなつたら、悲しむ人だつているのよ…」

「僕、もう決めたんだ！！あいつを守れるの、僕しかいないから…最後まで、あいつを励まさなきやいけないから…それに今、あいつすつじく落ち込んでるから…だから…」「めんね、蘭ねーちゃん…」

…

「コナンの言葉一つ一つに重みを感じて…それ以上は反対できなかつた…」コナンの言葉を聞きながら、肩を震わせ…閉じた瞳から涙がこぼれ出してこた…。

「ビハンド…ビハンドコナン君は…」

そうこいながら、コナンの小さな身体を抱きしめた…。

「だつたら、精一杯…琅ちゃんの事、守つてあげるのよ…」

「うん…分かった…」ありがと…、蘭ねーちゃん…」めんね…」

もつ、これ以上コナンにいぐり説得したとしても…納得なんてしてはくれない…。

誰が何を言つても、決してその決意を捻じ曲げる事なんてできない…。

そう感じた一回は、コナンの意思を悲しくも、受け入れる事にした…。

この先、何があろうとも…コナンはこの時した決意を途中でやめる事なんてしないだろ…。

この先、なにがあろうとも…絶対に…。

こんばんわ ｗｗ

本日一度田の投稿になります。

休みだと、時間があつていいですね

その休みも、もうそろそろ終わるのですが…。

ところどころ、明かさない様な
感じには書いていますが、多分
そろそろわかつちゃいます。

12話は特に ｗｗｗ

では、いつもの行きます（笑）

次回のヒント

すまない

では、また明日
お楽しみに

▼01・11 ノナンの覚悟に流れる涙

その様子を見ていた坂井医師は、ノナンの方に向きを変えると真っ直ぐと顔を覗むけたで言った…。

「ノナン君…私は医師として…君のいう事を受け入れる事は出来ない…出来ないけど…君はもう、意志を変えるつもりなんてないんだろう？」

「うん…！」

再確認する坂井医師の目をじっと見て、真剣な表情のまま返事をするノナン…。

ノナンの目の目が、とても力強く…言葉を詰まらせられる…そんなノナンを見て、坂井医師はゆっくりと言い聞かせる様に話だした…。

「ノナン君…今を逃せば、君の命を救う事が出来なくなる…この先、病状が悪化すれば、いくら手術をした所で、君を助けられないんだよ？分かってる？？」

「うん…！」

そんな事を言つても尚、意志を曲げようとしたないノナンを見ると…坂井医師はもう…「ノナンを止める言葉を失つていた…。

「今は元気だけ…これから、少しづつ病状が進行する…今よりもずっと辛い思いをする事になるんだよ？覚悟はできてる？？」

「うん…！大丈夫だよ？その位、分かってるから…」

もつ、何を言つてもダメなコナンに坂井医師は諦め、それならばと…「コナンの顔を覗き込むと、真剣な眼差しで言つた…。

「だったら、コナン君…これだけは守つてくれないか??絶対に無理しないつて…少しでも、体調がおかしいと思つたら、先生に言つてほしんだ…」

コナンの肩に手を置いて頼む坂井医師の言葉に…少し俯くと、静かに言つた…。

「ダメだよ、ダメだよ先生…少し位無理しなかつたら、あいつに…灰原にバレちゃうじゃない…！」

「えつ？じゃ…灰原さんには…」

「うん！灰原には…僕の病気の事も全部…黙つてほしんだ…！…あいつに言つたら絶対反対されるし…それに、いつか言えたら言おつて思つてゐからや…」

そういう終わると、コナンは坂井医師に笑顔を見せた…。

そんなコナンの浮かべた笑顔を前にした坂井医師は耐えきれず、瞳から涙が溢れ出した…。

コナンは驚き、坂井医師の顔を覗き込んだ…それを隠すように、自分の手で顔を覆い…涙を拭うと言つた…。

「すまない…」

初めて見る坂井医師の涙を目にすると…コナンは視線を落とした…。

コナンは分かつていた…自分の行動が周りにいる人達を悲しませ

てるつて事を……だけど、どうしても助けたい……坂井医師を泣かせる事になつても、その意志は変える事なんて出来なかつた……。

「「」あんね、先生……僕、もう一度あいつの所へ行つてくるよ……」

もうこれ以上、悲しい顔を見たくなかつたコナンは足早に診察室を飛び出した。

こんばんわ

昨日の投稿で、結構分かってくれた見たいだったので、よかつたです。

次回は少年探偵団にコナンが言い聞かす事になるので、そのセリフから本当に明らかになるといったのですが…もう心配ないようです。実は、短編で書いた時、読者にも最後の最後まで内緒にしておくストーリーにしてあつたのですが、連載にすると一気に読むという事が難しいので、明かしました。

書いていると、読む側に回る事がすこく難しいので、バツさなきやよかつたのについて思つてしまつたら、ごめんなさいww

でも、これから楽しんでもらえたら、うれしいです。

次回ヒント
笑うコナン

それでは、また明日会いましょう(=、・、)人(、・、=)

v01・12 笑つていってくれよ... (前書き)

今回はいつもより、短いです
二回に分けて時間をあけての投稿しようかと思ったのですが、無理で
した
その代わり、明日は長いですww

「コナン君ーー！」

哀の病室へ向かおうと、足を進めていたコナンに歩美は声をかけた…。

コナンは振り向くと、淋しそうな表情をしたまま…田線を三人の方に向けるて言った…。

「『じめんな…隠していた拳句、こんな事勝手に決めちまつて…』」

「コナン君…どうしても…どうしても…駄目なの？もう、決めちゃつたの？？」

謝るコナンに対し、歩美は泣きじゃくりながらコナンに訴えるかのような声で聞いた…。

「あいつは…心臓移植しなきや死んじまうんだ…だから、もうこれしかないと決めたんだよ…勝手かもしけないけど、あいつを守るのは、俺しかいなからわ…」

コナンは淋しそうな表情を浮かべながら、三の方に身体を向けて言った…。

「だから、『じめんな…』

「コナン君…」

そんなコナンの言葉を聞いた三人は涙を堪える事が出来なかつた…。

「泣くなよな…俺はさ、俺の前ではさ、最期まで笑つててほしんだ

…」

「コナン……」

「頼むよ…俺の最期のお願い聞いてくれないか??」

そんなお願ひをするコナンをみると、三人は何も言えず…ただ、涙を流すだけだった…それを見たコナンは微笑みながら明るく言った。

…。

「ほら、行こうぜ? あいつ、今一人なんだからや…」

「うん……」

やつとの想いで返事をする三人は顔を見合せると…コナンに精一杯の笑顔を見せた…そして四人で哀のいる病室へ向かった…。

▼01・12 笑つていってくれよ... (後書き)

今晚わWW

今日は仕事始めでしたWW始まりだと書つのに、仕事中居眠り状態でした￥(／＼＼＼＼)￥

明日からは氣をつけなきゃです(^○^)/

今日は、探偵団との会話でしたWW

コナンの決意に何も言えない探偵団達は、なんだか、さみしそうです(T__T)＼(^ - ^)

書いてる自分が言つのも、なんですがWW

次回ヒントは
諦めるな

です 今日から仕事初めの人も、明日からの人も、まだ、まだおやすみが続く人も、残りの正月を楽しんでください(^○^)/

明日お仕事の人は、お仕事頑張りましょう
また、明日の投稿お楽しみに

哀のいる病室の扉を開けると、博士が心配そうな面持ちで哀を見ていた……。

「ナン達に気づいた博士は少し淋しそうな表情をして田だけで哀に視線を送つた……。

「ナン達は哀の側に近寄ると、声をかけた……。

「灰原……」

「そうこの「ナン」の声に哀は不機嫌になりながら、冷たく言い放つた……。

「出でつてくれない??」

「哀ちゃん、あのね……」

「出でつてつて言つてゐるぢやない……」

相当ショックなんだらつて……普段言わない歩美の言葉にまでも冷たく言い放つ灰原……見兼ねた「ナン」は小さく微笑みながら言つた……。

「まあ、さう言つなつて……せつかく来てくれたんだぜ??」

「余計なお世話よ……」

「……お前、もう……諒めてんのかよ?」

呆れながら言つて「ナン」の言葉に、灰原はベッドから起き上がり、「ナン」の方を向き叫びだした……。

「あなたに…貴方なんかに何がわかるのよ…病気になつた事のない人に私の気持ちなんてわかる分けないのよ…！」

コナンの事情を知らない哀は、コナンに向けて…突き刺さる言葉を投げかけていた…。

「哀ちゃん…！コナン君は…コナン君はね…」
「分からぬ…」

見兼ねた歩美が言いかけた言葉を遮り、コナンは小さくつぶやいた…。

「分からぬ…よ…ドナーが見つかるかもしけねーって…」のに、諦めてるお前の気持ちがな…！」

その言葉を聞いた哀は言葉を失つて、瞳に溜め込んでいた涙が更に溢れ出し…勢いよく頬を伝つた…。

その時、ナースコールから聞こえて来た坂井医師の声で話はそこで終わりになつた…。

「コナン君？そこにあるかい？？」
「…あつ、先生…すぐ戻るよ…」

コナンはそう返事して哀に微笑むと…静かに扉の方へ向かつた…。

「灰原…とりあえず、諦めるはやめろよな…また来るからさ…じゃあな！」

そう言つて、コナンは静かに扉を開けて病室を後にした…。

「ナンがいなくなつた後の病室の中で、哀と阿笠博士と少年探偵団は沈黙の中を神妙な面持ちのまま残されていた……。

「……あなた達も帰つていいわよ……」

沈黙を破つたのは哀だつた……。

哀は俯きながら、歩美達の顔を見ずに静かに言つた……。

「でも……」

「いいから、帰つてくれない……」のまじや、あなた達にもつとひどい事言つてしまつもの……」

涙を流しながら訴える、哀を見た歩美達は顔を見合わせると、静かに口を開いた。

「じゃあ、灰原さん……またきますから……」

「元気だせよ……」

「またね、哀ちゃん……」

それぞれに顔をあげてくれない哀にそつ挨拶をすると、歩美達もまた静かに出て行つた……。

▼01・13 分からぬーよ…… (後書き)

こんばんわwww

今日はお祭りだった為、投稿が遅くなつてしませんwww

いつも楽しみにしていただけて、ありがとうございます。

それでは、今回の一言が少ないですが、

次回ヒント

もう一つだけ…

では、また明日お楽しみに
もしかしたら、一回投稿するかもです(^〇^)

坂井医師に呼び戻されたコナンは診察室の扉を静かに開けた…。

「やあ、コナン君…悪かったね、呼び出したりして…」

「いいんだ…」

そんなコナンの顔を覗く坂井医師は、あえて聞かず…コナンを診察室の椅子に促した…。

「ねえ、おじさんと蘭ねーちゃんは？？」

「また明日くるって言つて、今日は帰つたよ…」

そう聞いたコナンは少し淋しい表情を浮かべて言つた…。

「えつ？僕を置いて？？」

「何を言つてるんだい、コナン君…君は今入院中なんだよ…」

笑いながら、コナンに言い聞かせた坂井医師の言葉に目を丸くすると、思い出したかの様に咳いた…。

「あつ、そつか…」

「そつかじやないだろ？…そんなおじや、灰原さんの事守れないぞ

？」

半分飽きながら言つ坂井医師に促されながら、服を持ち上げて軽い診察を受けていた…。

「ねえ、先生…もう一つ、お願ひ聞いて欲しいんだけど…」

「……怖いな…なんだい？」

診察を終えたコナンは坂井医師の顔を覗き込みながら、恐る恐る聞いてみた。

「ギリギリまで…学校には、行かせて欲しいんだ…終わつたら、ちゃんと病院に帰つて来るからさ…」

「……」

「大丈夫だよ、まだ何もないしさ…それに、死んじやつたら学校にはもう行けないでしょ？…この後だつて突然いけなくなつちやうかもしれないしさ…だから今の内に行つておきたいんだよ…お願ひ、先生！…」

考え込む坂井医師にコナンは必死になつて訴えかける様に頼み込んだ…。

「大丈夫！ちゃんと、あいつらのそばにいるから、何かあつたら救急車を呼んでくれる様に頼んでおくからや！…」

黙つてしまつた坂井医師にじうにか、分かつてもらえる様に…コナンは必死に訴えかけていた…。

そんなコナンに坂井医師は言い聞かせる様に話し始めた…。

「コナン君…君は、もう本当は手術しなきゃいけない身体だ…時間がなつて言つ事も分かるよね？」

「うん…」

「学校に行かせたら、何が起つるか分からんんだよ…倒れる事だ

つて…苦しくなる事だつてある…立つ事もできなくなる事だつてあるかもしない…いずれにせよ、危険な事はこれ以上はさせられなによ…コナン君…」

コナンの訴えも虚しく、坂井医師は頑なに学校への登校を許す事は出来なかつた…。

「先生…」

それでも、諦めきれないコナンは…カルテにペンを走らせ始めた坂井医師の顔を見ながら名前を呼んだ…。

コナンの小さな声を聞いた坂井医師は、カルテから田を離してペンを置き…コナンの方に体を向けると…黙つた…。

「じゃあ、2日後…2日間、様子を見て何もなかつたら…許可する…何かあつたら、大人しく…病室で寝てる事…それでいいかい？？」「先生…」

坂井医師のその言葉に、コナンは嬉しそうに満面の笑顔を向けた…。

「ありがとう、先生…！」

坂井医師に向けたコナンのその屈託のない笑顔が…より、これからコナンの身体の事を不安にさせられる…。

今は病気なんかつてないと、思わせられる位元気だけ…これが、コナンの身体の本番になる。

その事を坂井医師は先程の診察を通して再確認し…目の前で笑つて

じるコナンの笑顔を目に焼き付けた…。

いつまで…この本当の笑顔を見られるのか…坂井医師は、コナンの笑顔を前にし…複雑な面持ちでコナンの頭を撫でながら、笑顔を返した…。

零れそうな涙を食い止めながら…。

▼01・14 行かせて先生…（後書き）

おはようございます

今日は仕事がお休みなため、朝からの投稿です（^〇^）／いつも
今頃、通勤時間ですね

寒くてまだ、布団からでられない状況です（^ - ^）／

この頃から、コナンのお願いにビクく先生…まあ、それでも真剣
に聞いちゃうのですがww

まだ、コナンの病氣が進行していない状況での次回ですww

それでは…

次回ヒント

慌てる

です。誰が慌てるのか、今回の話からは予想もつかないかんじですが、また今日の何処かで投稿しようと思います。

それでは…お楽しみに

——翌々日——

夕方、学校から帰ってきた蘭はコナンの病院を訪れた。ベッドの側に近寄つてみると、両腕を頭の側まで折り曲げながら、小さく寝息を立てて眠つていた。

「コナン君、コナン君……」

夕飯が運ばれてきたのを見ると、蘭はコナンの体を揺り起しやうと試みた。

暫くすると、コナンは重い瞼をゆっくり開けると、蘭の顔を視界に入れだした。

「……蘭ね～ちゃん……」

「おはよ、コナン君……よく寝てたね……夕飯だつて……」

そう聞いたコナンは勢いよく起き上がった。

「今、何時? ?」

「もうすぐ5時よ……」

「……行かなくちゃ……」

やつぱり、コナンはベッドから飛び降りた。そして着替えようと自分の服を探していた。

「あれ？僕の服は？？」

「えつ？？持つて帰つちゃつたけど…大丈夫よ、明日の朝持つて来るから…」

そう言つて諭す蘭を見ながら、コナンは困つた顔で蘭向かつて口を開いた…。

「明日じゃ間に合わないんだよ～、今、必要なんだよ～」

「どうして？」

「灰原の所に行くのに、こんな格好で行つたら、入院してのばれちゃうじゃない！！」

その騒ぎに生じて、坂井医師が子供用のコートを持つて入つてきた…。

そしてコナンに羽織らせると、こいつ笑つて言つた。

「これで問題ないだろ？？パジャマもコートで隠れるし…でも、夕飯食べ終わつてから行きなさい…」

「…あ、ありがと……」

突然の坂井医師の提案に、驚きながら、お礼を言つコナンは…急いで夕食を口に詰め込ませた…。

ゆつくり食べる様に促す坂井医師だつたが…“分かつて”“分かつて”といながら…食べる速度は変わらなかつた…。

「いってきまーす」

夕飯を食べ終ると…そう言つて、勢によくベッドから飛び降り…慌

てて病室から出て行くコナンを坂井医師と蘭は顔を見合わせ……笑っていた……。

「コナン君、走らない……」
「はーい」

そう言つて、病院の廊下を走りながら、哀の病室に駆け込んだ……。

食事をしていた哀は突然扉がバンと開いた事に驚き……扉に目をやつた……。

「よつ……」
「何よ、慌てて入つてきて……死んだと思った?? 悪いけど、まだ辛うじて生きてるわ……」心配なく……

扉を開けた犯人がコナンだと知ると……哀はいつもの様に、コナンに向けて嫌味な口調で言い放つた……。

「お前が簡単に死ぬわけねーだろ……悪かつたな、今日はちょっと遅くなつちまつて……」
「……悪いけど、私あなたの事待つてるつもりなんてないわ……」
「そう言つなつて……」

予想通りの口調に、コナンは微笑み……扉を閉め哀の側に近寄つた……。

「どうだ? 具合は……」
「そう言つて、聞いて欲しくないんだけど……」
「いいじゃねーか、教えるよ……」

具合いを聞かれ、機嫌悪くする哀を心配するコナンだつたけど…、嫌味を言つ哀を田の前にして…聞かなくとも、具合いはいいのはわかつっていた。

「別に…普通よ…」

やつと答えてくれる哀に、漸くコナンも微笑む事が出来る…そんなコナンを横目で見ながら、黙々と夕飯を食べ続けていた…。

▼ 01・15 早く行かなきゃいけないんだ……（後書き）

こんばんわ www

今日は新年初のコナンでしたね(^〇^) /
Twitterしながら、みていたんですが、
皆さん興奮しちゃって、TLが
早すぎちゃいました(^ - ^) /

それほど、可愛いですよね¥(/ / / /) ¥

コ蘭は特に www

ちなみに私も大興奮でした www
あれは、一人じゃないと見られないくらいに www

次回ヒント

散歩

また明日、
お楽しみに

夕飯を食べ終わった後の一室で…「ナンは再び尋ねた…。

「なあ…あの…」

「何よ…」

そう聞く「ナンはもうくつと田線を哀の心臓へと移した…。

「…大丈夫だつて言つてるじゃない…余計な心配しないでくれない…」

「じゃあさ、散歩行かねーか??」

「ナン」は哀の調子が平気なのを再確認すると、満面の笑みで問いかけた…。

「はあ？」

「行こうぜ…ここに居てもつまんねーしよ…」

「だつたら、帰つて推理小説でも読めばいいじゃない…」

「俺じやねーよ、お前がさ…」

「私の事はほつといてつて何度も言つたら、分かるのよ…」

私の事は構わないでと一矢張りの哀に、「ナンはもう一度恐る恐る聞いて見た…。

「なあ…灰原…」

「い、や、よつ…」

「少しだ…」

「嫌つつ…」

それだけ言つと、袴は布団を被り……それ以上答えてくれなかつた。

「ナンはため息をして一言言い残すと……仕方なく、病室を出る事にした……。

「また明日来るからな……」

「ナンが出て行つたのを、扉の方に目をやりながら確認した……。

「フンッ」

それだけ言つと、再び布団を被り……不機嫌なまま寝たふりを始めた……。

病室に戻つた「ナン」に、坂井医師は明日の学校への許可を下す為に入念な診察を行つていた……。

「これなら、許可しても問題ないかな……「ナン君」

「ありがと、先生……」

明日の学校への許可が下りて、一安心している「ナン」の手に坂井医師はにっこりしながら、注意事項が書いてる紙を手渡した……。

「これ、明日担任の先生に渡すんだよ……それと、分かつていてると思うけど……体育は禁止……少しでも体調が悪くなつたら、必ず誰かに言う事……」

「うん、分かつた……」

「コナンの返事にこりこり笑う坂井医師は、暫くコナンの手をじっと見つめて頭を撫でていた…。

「コナン…！」

そう言いながら入ってきた少年探偵団に、コナンは微笑みながら振り向いた…。

「おう…」

「ここに居たんですね、灰原さんの所かと思つて行つたんですが、灰原さん、寝てるみたいだつたので…」

「いや、寝てねーよ…」

光彦の説明に、否定するコナンに不思議になる三人と坂井医師につきの事を話した…。

その話を聞いて初めに声をあげたのは坂井医師だつた…。

「えつ？ダメじゃないかコナン君…先生は散歩なんてそんな事許可した覚えないぞ…！」

「でも、中庭くらいならいいでしょ？」

「ダメだよ…！何かあつたら、どうするんだい？？」

そういわれ、黙るコナンに先生は再度口を開いた…。

「でも、良かつたな…灰原さんが断つてくれて…」

「先生…」

「君にもしもの事があつたら、誰が灰原さんを守るんだい？」

「…そうだね…『ごめんなさい…』」

そういつて観念したコナンはゆうくり俯いて謝った。

「皆も、明日からコナン君の事よろしくな…ちゃんと見張ってくれ…これ以上、無茶しない様に…」

「はい、任せてください…！」

「俺らがついてるから、大丈夫くなつ？」

「うん…！」

凹んでいるコナン対して、三人は”コナンを守る”と張り切つていた。

そんな三人を尻目にコナンはどうにか明日の登校の許可を下された事に、安堵していた…。

そして残り少ない自分の命を、どう生きようかと…コナンはその気持ちに立ち向かっていた…。

こんばんわ ｗｗ

いつも、感想ありがとうございます(^ ^)

とても励みになっています(、 、)ノ

返信が遅くなる場合もありますが、気長に待つて頂けると幸です。
だいたいは、ここを開いたらすぐに返せるんですが…。

改めまして深夜の投稿になります。

休日になると、ダラダラしてしまってダメですね ｗｗ

次回ヒント

不機嫌

また夜当たり??

になると思いますが、お楽しみに(^ - ^) -

次回は少し、短いです￥(、 、 、)￥

「おはよ、「コナン君…はい、熱計つて…」

そつ言われ、体温計を脇に挟む「コナン…再び看護婦さんの方に皿をやると…聞いた。

「ねえ、なんで僕入院しなきゃいけないの…まだ、何もないのに…」

「何かあつたら、困るからよ…」

「何かあつてからでもいいじゃな…」

「それじゃ、遅いの…ダメよ、わがまま言つたら…」

体温計が鳴るのを待つ間…看護婦さん…文句を言つ「コナンは…学校の許可が下りた事で…自宅から通いたくなつて来ていた…。

「僕、元気だよ?」

そんなやり取りをしてる内に体温計が鳴つて看護婦さん…よつて、平熱が確認された…。

「大丈夫ね、じゃあ…お姉さんが迎えに来るまで待つてね…」

「いいよ、自分で行けるから…」

そつ言つと、タベ蘭がこつそり置きに来ていた服に着替えると…ランドセルを背負つて病室を飛び出した…。

「まちなさい、「コナン君…」

「こつてきまーす…」

急いで走り出したコナンはその時丁度やつてきた蘭とぶつかって、尻もちをついた。

「コナン君……もひ、待つてひつひつたじやなー……はい……」

そう言ひて、コナンに手を差し伸べた。

「それじゃ、いってきまーす……」

そう挨拶する蘭に連れられて、今度は大人しく学校に向かった。

「蘭ねーちゃん…迎えに来なくていいよ…」
「いこじやない、一緒に行こひよ…」
「どうせ、僕の事が心配なんでしょう?何かあつたら困るから…」
「…コナン君…どうしたのよ…」

いつもと違つて少し不機嫌なコナンに少し心配になつていて。

「探偵事務所から学校に行きたいんだよ…」
「…じや、後で先生に聞いてみよつか?」
「えつ?…う、うん…」

口から出た我儘によつて、怒られるかと思つていたコナンだったが、蘭に優しく諭され、目を丸くした。

▼01・17

不機嫌なコナン（後書き）

次回ヒント
ひどい

また夜に来ます

「じゃ、俺…先生の所に行つて来るから…」

「分かりました~」

「先、行つてるぜ」

「おうひ~」

無事に学校が終わり、歩美達にそつ言葉を交わした後…コナンは坂井医師の居る、診察室に向かつた…。

コナンはゆつくり診察室の扉を開けると…そこには、コナンの帰りを待ち望んでいた坂井医師が居た…。

「どうだつた?学校は?」

「大丈夫だよ…ちゃんと帰つてきたじゃない…元気だよ…」

体調の事を聞かれたと思ったコナンは賢明に何もない事を訴えた…。

「そうじゃなくて…楽しかつたかい?」

「あ~、うん…」

そう答えるコナンに坂井医師は安堵した…しかし次の瞬間、コナンの顔色が良くない事に気づいてコナンの額に手を当つと伸ばした…。

「だ、大丈夫だよ…」

そういうながら、坂井医師が伸ばす手を避けて…両手で自分の額を

覆つた…。

「コナン君、ちょっと来なれー…」

「僕、灰原の所へ行かなきゃだから、またね…」

そう言つて出て行こうとするコナンの手を掴み、後ろから体を抱き込むと…強引に額に手を当てた…。

「やつぱり…熱あるんじゃないか…隠しちゃダメだろ、コナン君…」

「ひどいよ、先生…」

不意を打たれたコナンは坂井医師の言葉を聞き流し…抱き込まれた身体を摩つた…。

そんなコナンの背中を押しながら、病室に戻るよつと促した…。

「まだ、灰原の所へ行つてないんだよーー…」

「でも、熱があるよ…」

「ただの風邪だよ…灰原の所に行つてからでもいいでしょーっ…」

少し熱が高いくらいだった為、坂井医師は…「コナンにマスクを装着させた…。

「じゃ、先生も付いて行くよ…」

そう言つて、コナンの手を握り…哀の病室まで歩き出した…。

こんばんわ ～～

とりあえず、今日はこれで
ラストになります。

次回ヒント

待つてて

また明日…

投稿するのは昼間か…夜かに
なると思います。

楽しみに待つてください。

「じゃあ、先生はここで待つてね…」

「ああ、行つておいで…」

そう言つて、哀の病室の扉を開けるコナン…。

哀の病室に入つて行くのを見届けると…坂井医師は、壁にもたれ掛かり…そつと、息を吐いた…。

しばらくすると…病室の中では、明るい声が聞こえ始めた…でも、この明るい声はいつまでも続かないのは分かっていた…。

後、何ヶ月後には…涙声に変わると…そんな事をぼんやり考えながら、今はただ…コナンや哀の事を賢明に支え抜くしかないと思つていた…。

白衣のポケットに自分の手を突っ込んで待つていると…哀とコナンの口喧嘩が耳に入る…それを聞くと、少し顔が微笑んだ…。

そんな光景を耳にすると…出来るだけ永く、生きさせてあげたいと強く思つのだつた…。

「コナン君…！」

「悪いな、待たせて…元氣か？」

コナンは哀の病室の扉を開け、声をかけた。暫く話した後、哀の方へ向きを変える……。

元気そうに見えるが、念の為聞く「コナン」に… 哀は不機嫌な目をさせ、コナンの付けてるマスクを睨んで言った…。

「何、そのマスク…風邪でもひいたのかしら？」

ああ、今日寒がりたし……予防たよ……

「そんなんて誤魔化せると思ってるの？貴方は帰りなさい……風邪でも移されたら迷惑だわ……」

心配ねーよ、ただの風邪だから……

כט – יונתן – יג

哀の口調がだんだん強くなつていいくのを感じ、それ以上は言えずにいた……。

「わあつたよ…じゅ…」

「たよこや、ちゃんと風邪治してから来なさいよな。」

ああ…

そう一言残すと、コナンは哀の病室を出ていった…。

「灰原さん… もつあよつと優しくいってあげてもいいんじゃないですか？ ナン君、心配してるんですから…」
「これでも、優しく言つてもらひよ…」

本当は、コナンはもう永く生きられないと言いたかった……。

でも、コナンの気持ちを考えたら、そんな事が裂けても言つ事なんてできない…。

そんな三人の気持ちも裏腹に…哀はいつも通り、コナンに冷たく当たつてしまふのだった…。

▼ 01.19

優しくしてあげたい（後書き）

寝る前に、もう一話
投稿したいと思います。

次回ヒント
哀の病室で

では、今度こそ、また明日ね
おやすみなさい。

「先生……」

哀に冷たくあしらわれ、凹みながら出てきたコナンに坂井医師は姿勢を正すと言つた。

「コナン君…隨分早かつたね…」

「マスクしていたから…灰原に、追い出されちゃつて…」

そういうながら、頭を搔いて笑うコナンに詰め寄る坂井医師は、コナンの目線までしゃがみ込み、額に手を当てるか心配そうに聞いた。

「大丈夫かい？」

「えつ？う、うん…平氣…」

「そつか…じゃあ、行こつか？」

そう言つて、坂井医師はコナンに背中を差し出した。その行動にコナンはキョトンとして目をパチパチさせていた。

「ほら、おんぶ…病室まで連れてつてあげるから…」

「いいよ…」

恥ずかしげに言つコナンに、坂井医師は促し続けた。

「僕、先に帰るから~」

「あつ、コナン君…待ちなさい…」

そんな坂井医師の優しさに照れながら、コナンは一人で病室まで走

つて行つてしまつた…。

「たくつ…」

そう言つて、坂井医師だつたけど…元氣に走るコナンを見て、少しばかり微笑んでいた…。

病室に戻ると、コナンをベッドに座らせて…体温計で熱を計つていた…。

「うーん、やつぱり少しあるね…」

「明日…下がる?/?」

体温計を覗く坂井医師の顔を見つめながら、心配そうに聞くコナン

…。

「コナン君が大人しく寝ていれば、下がるんじゃない?」

「…」

「ハハ、大丈夫…薬のんで、点滴すれば…明日には下がるから…安心して寝てなさい…」

「うん、わかった…」

そう言つて、コナンを寝かせて布団をかけると、コナンの頭を撫でながら微笑んで言つた。

「それと…具合いが悪くなつたら、今度はちやんと言つてだよ?いいね?」

「はーい…」

その頃、哀の病室にいた三人が病室を出ようとしていた時、事は起
じつた。

「それじゃあ…僕達もそろそろ帰ります…」
「また明日来るからよ…」
「待つて…」

そう言つて帰るつと、背中を向けた三人に哀が声をかけた。

振り向いた三人はその光景を目にすると驚きながら詰め寄つた。

「哀ちゃん…」
「うう…悪いんだけど…うう…行く前に、ナースコール…押し
て行つてくれ…ない？はあつああ…」

それだけ言つと、哀はベッドに倒れこんだ。

哀が胸を押さえて、苦しそうにしていたのを見て…急いでナースコ
ールを鳴らす光彦…。

「早く、来てください…灰原さんが…灰原さんが…」

駆けつけた坂井医師や看護婦さんは、哀に声をかけられながら、ス
トレッチャーに乗せられる…。

「ああつ…」

「灰原さん、大丈夫だよ…少しだけ辛抱するんだよ…」

そういうながら、哀の乗せられたストレッチャーが処置室へと運ばれて行つた…。

その様子を歩美、元太、光彦はただ、漠然と立ちすくんでいた…。

その非常事態を由にして…不安いっぱいな気持ちで、処置室の扉を見つめていた…。

その沈黙を破り、思い出したかの様に、光彦が口を開いた…。

「そうだ…コナン君…コナン君にこの事知らせたほうがいいですよね…」

「そうだね、行こう…」

「おう！」

三人は口を揃えて言つと、コナンの居る病室に向かつた…。

こんばんわ

今日は遅くなりましたが
更新です

明日から仕事が
またスタートなので、
いつもの様に
一日一話ずつの
更新です

では
次回ヒント

風邪

ではまた明日の
更新まで
お楽しみに

その後すぐ、「コナンの病室の扉を静かに開けた歩美達…。

そこに飛び込んで来たのは、点滴に繋がれて…眠っているコナンだった…。

「コナン君…どうしたんですか?」

丁度、コナンの看病をしていた看護婦さんに光彦は聞いた…。

「ただの風邪だから、心配ないよ…少し熱があつたからね、点滴してたけど…明日の朝には下がるわよ…」

そう言つて、コナンの額に手を当てながら…ぬるくなつたタオルを変えていた…。

「今日は起きないの??

「丁度、さつき起つた所だから…何か用事??

歩美の問いに、看護婦さんは優しく聞いて来た…。

「灰原さんの事、伝えたほうがいいかと思いまして…」

「コナンのやつ、すげー心配してるからよ…」

その答えに、微笑む看護婦さんは…歩美達の田舎までしゃがんで言った。

「うーん、それはまだ伝えないほうがいいかな?それに、さつと先

生が教えてあげると思つかう…」

看護婦さんの言葉を耳にして、コナンの方へ目をやると…納得した
かの様に、返事をした…。

「わかりました…！」

「また、明日くる…！」

そうつ言って、三人は病室を後にした…。

哀が運ばれて三時間後、コナンは薄つすらと目を覚ました…。

開いたままの扉の方へ目を向けると…誰かがストレッチャーに乗せ
られて出て来るのが見えた…。

それが、哀だと知らず…コナン再び目を閉じて、眠りについた…。

ストレッチャーに乗せられて、病室に運ばれていった哀はベッドに
移されると…腕には点滴と口には酸素マスクが装着させられた…。

そして、哀の病室には…緊急事態を催す札が掛けられた…。

”面会謝絶”

そんな事とは知らず…コナンはスヤスヤと、夢の中へ落ちて行つた
…。

次回ヒント

内緒

こんばんわ　ｗｗ

今日は寒いですね（Ｔ—Ｔ）＼（^_^）
皆さんも、風邪ひかない様に
注意してくださいね（^_^）／

今日も、

眠い一日が終わりました
不本意ながら、居眠りをしてしまう始末…。
気をつけなきゃです。

今日は体力的にも精神的にも、
元気なので。(^_^)○
この回と、あと一話分投稿したいと
思っています。

来週、少し時間が空くので…
来週までとつておひつと思いましたが…

夜中の0時に予約しておきます（^_^）／
起きてる方は、読んで見てください（^〇^）／

それでは、また
0時に　ｗｗｗ

目を覚ましたコナンに坂井医師は額に手を当てて、容体を確認していました。

「大丈夫だね…熱は下がってるよ…」

その言葉にコナンを含め…歩美、光彦、元太は安堵の表情を浮かべていた…。

学校へ行く為、支度をしていたコナンに坂井医師は話かけた…。

「コナン君…今日学校が終わったら、先に先生の所へ来てくれるかい？話があるから…」

「…うん、分かった…」

坂井医師の言葉に、不思議に思ったコナンだったけど…そつ返事をすると、歩美達に連れられて…学校へ向かって行つた…。

放課後の教室で…帰る支度をしていたコナンに近寄り、光彦は言つた…。

「あの、コナン君…僕達、今日病院は遠慮しておきます…」

「何で？？」

「えっと、それは…ちょっと…小林先生に呼ばれてるの…」

「明日行くからって…灰原に伝えといってくれよ…」

「元太君…！」

三人の言葉に不思議になるが…仕方なく一人で行く事にした…。

「ああ、なんか知らねーけど…分かつたよ…」

「でも、病院までは付いてくから…」

「いいよ、小林先生んとこに行かなきやならねーんだり?」

「ダメですよ…僕達には、コナン君を病院まで送り届けると言つ、

大事な任務があるんですから…！」

「小林先生ん所はその後でいいからよ…」

その行動に、より疑問が募るコナンだったが…そのまま、二人の言う通りに従う事にした…。

「じゃ、気をつけてください…」

「ああ、本当に行かねーのか?」

「明日行くから…」

「ふーん、じゃあ、ありがとな…」

そう言うとコナンは、いつも通りに表の病室を訪れる為…階段を登り向かって行つた。

病室の手前まで来たコナンは、今朝の坂井医師の言葉を思い出した
…。

「あつ、やつだった…先に先生の所へ行くんだつたっけ…」

そう言って、戻るつとした時…コナンの目を疑わせるような物が飛び込んで来た…。

「面会謝絶……？」

それを見た瞬間、コナンは慌てながら哀の病室の扉を勢いよく開けた。

「灰原ああ……」

哀の病室に入ったコナンは田を疑つた。

そこには、機械音と共に、酸素マスクで口を覆われた哀が横たわっていた。

「何で？…どうして？？」

その瞬間、コナンの脳裏に…朝の先生の言葉や…歩美達の不思議な行動が蘇つて来る…。

「先生も…あいつらも…隠してたんだ…俺に…隠してたんだ…どうしてだよ…なんでだよ…」

哀の病室を訪れたコナンだったが、こんな哀の状態を田のあたりにして、教えてもらえなかつた事に悔しさを募らせていた。

そして、コナンは固く…固く…拳を握りしめ…その場に立ち去りはじめていた。

▼ 01・22

信じていたのと、嘘されていた」と

(後書き)

次回ヒント
ビックリだよ??

約束通り、0時です。

これから寝る人は、おやすみなさい（< - > - /

また明日の投稿をお楽しみにw w

▽01・23 もう…助けられないんだ…

「灰原？？」

そんな呼びかけに応えてくれない哀に…コナンは哀の手を取つて、何度も声をかけた…。

「灰原、灰原、灰原…」

哀の身体を揺らし、早く目を覚まして欲しいと願うコナンは既に冷静さをなくしていた…。

「工藤君…？？」

漸く目を覚ます灰原に、コナンは表情を固くしたまま、哀に問いかけた…。

「灰原……どうした？何があつた…」

「聞いて…ないの？…発作が起きたのよ…昨日…貴方が帰つた後…いよいよ…ヤバイわね、私…」

「発作？？」

「もう、死ぬの…近いわね…私…このままじゃ…生きられないのよね…」

「灰原…」

いいながら、哀は涙が頬を伝つた…。それを見たコナンはそのまま、哀の病室を飛び出した…。

「工藤君つづ…？」

「わあっ、コナン君？？」

丁度、哀の様子を見に来た看護婦さんと入れ違いになり、コナンの慌てた様子に驚き…看護婦さんも、慌てて哀の病室に入つて行つた…。

「哀ちゃん…大丈夫？？」

「ええ…私、余計なこと言つたかしら？？」

コナンの様子に不思議に思い、哀はポソリと漏らした…。

あんなに慌てたコナンを見た事がなかつた哀は、コナンの様子が少し気がかりになつていた…。

「大丈夫よ、心配ないよ…」

看護婦さんにそう言われ、哀は少し微笑んだ…。

哀の病室を飛び出したコナンは、坂井医師を見つけると、勢いよく叫んでいた…。

「せんせーいーー！」

「コナン君ー走っちゃダメだろ…」

そんな坂井医師の注意も聞こえないくらい哀の事を聞きたかったコナンは坂井医師のズボンを掴むと、叫ぶように聞いた…。

「先生ーー灰原つなんで？なんで？？面会謝絶つてどう言つ事だよ

「……先生……なんでだよ……教えてよ……先生……」

そう、叫ぶコナンに、先生はしゃがんでコナンの肩を掴むと、真剣な目をして聞いた。

「灰原さんの所に行つたのかい？？」

「行つたよ……灰原……何であんな状態になつてるんだよ……昨日はあんなに元気だつたのに……教えてよ、先生……」

「コナン君、どうして先に先生の所へ来てくれなかつたんだい？君がそうなるとthoughtっていたから、先に話そうとしていたんだよ……」

「そんなの、もうどうでもいいよ……聞かせてよ、灰原の事、聞かせてよ……」

哀の事で頭がいつぱいになつていたコナンに、坂井医師は言つて大丈夫かどうか、迷つていていた……。

「実は、灰原さんはね……」

迷つた挙句、いずれ言わなきやいけないのだったら、後にも先にも同じだと決心した坂井医師は、話す事にした……。

「実は、灰原さんね……病気の進行が少し早いんだ……このままだつたら、早い段階で灰原さんの心臓は……」

言いかけながら、コナンの瞳を見つめる坂井医師は、コナンの瞳に溜まつている涙を見つめ、驚いた……。

「コナン君……？」

「もう、いいよ……灰原は死んじやうんでしょ？僕より先に死んじやうんでしょ？先生は助けられないんでしょ？だったら、もういいよ

!—

「コナン君、落ち着きなさい!—」

涙田になつて行くコナンの両手を掴む坂井医師は、コナンの顔をジツと見つめた。

「結局、僕はあいつの事を助けられないじゃない……何もできないじゃない……僕は……あいつを……助けられない……」

そう言つて、コナンはだんだんと小さくなつていぐ声に嗚咽を漏らし……そのまま廊下に手を付き……悔しさを募らせていた。

▼01・23 もつ…助けられないんだ…（後書き）

次回ヒント

逃げる

おはよーひーじゅーいります。

今朝は早く田が覚めてしまい、この時間に投稿したいと思ひます。

「ナンパニックです。

でも、それは哀ちゃんを思つてゐるからの行動になつてゐるんですね

www

この話に出て來る「ナン」は、子供っぽい、少し我儘な「ナン」になつてゐます。

最後は、申し訳ないことになつていますが、また次回の更新、楽しみにしていてくださいね

凹んでしまったコナンの両手を掴む坂井医師は、コナンを立たせると…諭す様に問いかけた…。

「コナン君、灰原さんはね…小さいけど…小さいなりに、ちゃんと心臓を動かして生きてるよ…」

「……」

「灰原さんを救うんだろ？君が灰原さんを励まさなきゃいけないんだろ？前、先生に言つたよね？そう、言つたよね？？」

コナンに向けて、必死にまくし立てながら言ひ聞かせようとする坂井医師に対して、コナンは自分の腕を掴んでる坂井医師の手を振り解こうと必死になつてもがいていた…。

「離してよつ先生、離してよつ…！」

困つた様な表情をしながら、コナンは坂井医師から離れるので必死になつていた…。

そんなコナンを坂井医師は抱き締めた…。

「離さない！！先生は絶対にコナン君を離したりしないよ…！…だから、コナン君…お願いだから、諦めないでくれないないか？まだ、望みは絶えてない…」

そんな坂井医師の言葉にも耳をくれず、コナンは力一杯坂井医師を押し退けた…。

「 もう、 いいよ … 先生なんか、 もう信用なんてしないよ … 」

その弾みで坂井医師は、 よりけ … コナンは涙目になりながら、 坂井医師に背を向けると勢いよく走り出した … 。

「 コナン君 … 」

コナンは坂井医師に追いかけられながらも、 懸命に走り … 自分の病室に逃げ込み、 ベッドに潜り込んだ … 。

コナンの後を追つて来た坂井医師は、 病室に戻ったのを見て安心する … 。

坂井医師は、 そつと息を吐くと … 静かに病室に入り、 ベッドの近くに置いてあつた丸椅子に腰掛け、 コナンが潜っている布団の上に手を置いて言った … 。

「 コナン君 … 先生に顔見せてくれないかな? 」
「 僕の事なんか、 ほつといてよ … 」

そう言つたコナンに、 坂井医師は話を始めた … 。

「 コナン君 … 隠していたわけじゃないんだ … 言おうと思つたけど …
君は昨日風邪をひいていただろ? だから、 後々話すつもりだったんだよ … 」

「 もう、 遅いよ … それに … あいつは … 」

何かを言おうとした … 口を閉じたコナンに、 先生は優しく諭しました … 。

「コナン君……さつき、先生は灰原さんの病気…進行が早いつて言つたけど…すぐにつてわけじゃないんだよ…少しずつ、治療をしていくべき、進行を遅らす事も出来るから…」

坂井医師のその言葉に、布団の中で田を見開くコナン…。

そんな、コナンの様子を知らず…坂井医師はそのまま話を続けた…。

「さつきは先生の言葉が足らず…誤解させちゃつて、『ごめんね…落ち着くまで、少し寝てなさい…先生、診察室にいるから、何かあつたら来るんだよ…』

そう言い残すと、病室にコナンを一人にして…坂井医師は静かに出て行つた…。

一人になつたコナンは布団の中で悔しみを込めて…胸の内に秘めた想いと一緒に、涙を流していた…。

守ると決めた哀の命を守る事が出来ないかも知れない…といつ事に…コナンは…諦めかけていた…。

次回ヒント
病気の事

こんばんわ　ｗｗ

いつも、読んでいただき（^ - ^）
そして、お気に入りや感想頂いて
ありがとうございます。

凄く勇気づけられます（=、、、）人（、、、=）

いつも、感謝しています。

これからも、毎日の更新頑張っていきます。

よろしくお願ひします。

では、また明日何時の投稿に
しようか、迷う所ですが…

更新まで、お待ちください（^ - ^）

「先生……」

連絡をもらつて駆けつけた小五郎と蘭は、坂井医師の姿を見つけると声をかけた……。

「今は落ち着いて、寝てると思いますので……心配はありませんが、精神的に傷付いているので……もう暫く、そつとしておいた方がいいでしょ?」

「そうですか、すいませんな……心配かけてしまって……」

そう言つて、頭を搔く小五郎に坂井医師は、申し訳なさそうに言葉を返した……。

「いえ、じつは……言葉が足らず、『ナン君を傷つけてしまっていません……』

「ここんですよ、あこつぽ……そんなタマジやないですか?」

そう言つと、小五郎はズカズカとナン君の病室に向かつた……。

残つた蘭は、『ナン君の病状が気になり……坂井医師に聞いかけた……』

「それと、先生……ナン君の病気の事なんですけど……」

「ええ、その事なんですが……もう、多少なり身体の何処かに何か変化が現れてもおかしくない状況なんですが……今の所何も問題はないんですよ……」

蘭にその事を聞かれ、坂井医師は、その事も「気がかりになつた為、コナンの状態に…不思議に思つていた…。

「まあ、我々も…コナン君の身体には充分氣を配つてありますので…何か起こつた時には、すぐ知らせますから…今の所は、安心していいください…」

「はい…分かりました」

蘭はそう説明した坂井医師に一礼をすると、コナンのいる病室に向かつていった…。

病室の扉を勢いよく開ける小五郎に、コナンは布団の中でそれを感じ取り、布団を強く握り締め…縮こまつてしまつた…。

「コナン…起きる…」

その言葉に返事をする事もなく…余計に布団を握る手に力が入る…。

それをみた小五郎は、無理やりにコナンの布団を剥がそうとする…。

「いいから、起きる…」

「取らないでよ…やめてよ…」

「やめてじゃねーんだよ…」

一生懸命に布団を握り締めるコナンの小さな反抗を、小五郎は負けずと布団を思い切り、引っ張りあげた…。

布団をとられたコナンはベッドに座り、小五郎から背中を向けた…。

そして、後からやって来た蘭は…コナンのその状況を心配していた

…。

「コナン君…」

蘭や小五郎に背を向けるコナンを心配し…蘭は声をかけたけど、返事をしてくれなかつた…。

「…」

そんなコナンに一喝し、嫌がるコナンの肩を掴み…無理やりに身体を向かせる小五郎…。

「やだよ…」

「いいから、向け…」

コナンの顔を覗き込む2人は驚いた…。

コナンの瞳に、溢れそつなくらいの涙が溜まつっていた事に田を見張つた…。

「コナン…」

そうつぶやく小五郎から、コナンは顔を背けた…。

小さな身体で、精一杯哀を守るつとしていた事は…一目瞭然だつた…そんな想いを、広い心で受けとめていたコナンに…2人は言葉を失つていた…。

次回ヒント
付いていてやれ…

こんばんわwww

今日は仕事が早く終わりました(^-^)
この時間に投稿で来て、一安心です(^-^)／＼

少し、アンケートを

小説の、投稿時間がいつも気になるんですが、個人の状況にもよる
と思いますが…

何時くらいの投稿が理想的か、教えてもらえると、助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4767z/>

小さな運命共同体

2012年1月12日16時48分発行